

曙光



(しょう)

2004.10.1
東北大学全学教育広報 No.18



自然科学総合実験授業風景(課題9：弦の振動と音楽)

東北大学の教育・学生生活支援の充実を目指して
- 学生と教員の相互輔(ほ)生活動の展開 -
東北大学理事・副総長 菅井 邦明... 2

総合科目「自分」の教養教育論
教育学研究科教授 水原 克敏... 5

退職(予定)教員から
○新しい大学教育のために
工学研究科教授 野澤 庸則... 8

○「出会い」に備えて「基礎」を大切に
生命科学研究科教授 大類 洋...10

○仙台で歴史を学ぶ意味
東北アジア研究センター教授 入間田 宣夫...12

東北大学OBから
○「現代学問論」を担当して
東北大学名誉教授 渡辺 誠...14

Webによる履修登録手続について
- (学内の)パソコンを利用したWebによる履修登録手続 -
.....16



東北大学の教育・学生生活支援の充実を目指して 学生と教員の相互輔（ほ）生活動の展開

東北大学理事・副総長 菅井 邦明

東北大学の学生の学習歴と行動は変容したのか？

日本の少子化

我が国の出生数は、減少傾向にある。昭和40年代後半の第二次ベビーブームには出生数は200万人を超えていたが、平成10年には120万人まで減少している。また日本の将来の人口推計によれば、西暦2050年には1億人まで減少することが見込まれている。このことは日本の教育システム全体にも大きな影響をもたらすことが予想される。

小・中・高校における総授業時間数の変容

	1968年	1998年
小学校6年	1085時間	945時間
中学校3年	1155時間	980時間
高校(最低単位数)	1960年	2003年
理科の一例	420時間(12単位)	140時間(4単位)

このように日本の小学校から高校までの学校5日制の教育課程は、総授業時間数で比較すると減少している。一部の受験校等では、この限りではない。

大学入学選抜の多様化

現在、入試センター試験+学力試験以外の、小論文・面接・AOなどの選抜方法で入学する学生は、全大学で40%近くに上る。東北大学でも後期試験、AO入試、推薦、特別選抜による学生数は入学者数の約29%になっている。

この小・中・高校における総授業時間の削減、の学力試験以外の入学者選抜方法の多様化と入学者の増大により、東北大学でも多様な学習歴の学生が入学している。さらに大学院への留学生の増加等も考えると、多様な「学力と学習歴」をもつ学生が確実に増加している。

問1：「学力」は低下したのか？

1960年代の高校の理科教育は12単位、現在は4単位、実質最低5単位である。しかしながら、総合的学習の時間は、高等学校では3単位ないし6単位が課されている。すなわち、知識の伝達とその暗記・習得こそが重要であった1960年代では、12単位。知識の伝達に加え、未知の現実的問題に対処しなければならない現在は、理科の基礎的な知識を伝える部分が実質5単位で

ある。しかし、これを応用し現実の問題を考えていく総合的な学習は3単位から6単位に設定されている。つまり、極端な例えではあるが、ある意味で現在の理科教育は、本来の理科教育の時間と総合的な学習を合わせて最低8単位～11単位の教育がなされていると見ることもできる。このような背景を考えると「学力」の意味内容が変容しているといえる。その意味では、ある範囲は低下し、ある範囲は向上していると考えらるべきであろう。

問2 学生の行動は変容したのか？

日本社会の価値観や行動の変容

	時代のキーワード	追求目標
1960年代	勤勉・節約・自己犠牲 根性、助け合い、まじめ 日本人の同質社会	豊かさと先進国に追いつけ
1990年代	バブル崩壊・規範の空洞化 国際化、まじめの崩壊、 高度情報化	目標おおむね達成 福祉社会
2000年以降	自己決定・自己責任 人との差異化・創造・正義	一人一人の生き方の意味

このように日本社会を支える価値観や行動規範が日本社会の追求目標の変化によって大きく変わってきていると考えられる。

1960年代は、上記のように、先進国に追いつくことが目標とされた国の政策の中で、より多くの知識を詰め込むような高校教育が求められ、大学生は「基礎的な学力」を備えて入学していた。人類の方向性が不透明である今日、学生にとっては一人一人の生きる意味、学問や科学の自分・社会との意味付けが重要な関心事になっている。現在の多様な学習歴・多様で豊かな感性を持った学生は、個々人の学習歴に沿った科目の選択が現在以上に可能な教育システムを望んでいる。我々の目の前にいる学生は、そのような社会背景と学校教育を受けて入学してきたのである。

新しい研究中心大学の教育環境を作るためには、どのような教育・学生支援が必要とされるのか？

補正(リメディアル)教育の必要性

高校教育内容の削減、選択性の拡大によって、基礎的な知識は部分的に低下しているといえるので、個別の学生のニーズに即した補正教育が必要である。

人間の諸問題解決への知の寄与を示す授業の必要性

学生がもつ生きることの意味、社会における学問や科学の意味づけなどへの関心は、積極的に伸ばすべきである。現在、全学教育の総合科目で行われている教育学研究科の水原教授(総長教育賞受賞)の「自分」や学生相談所の関係者の「心の問題の予防」の授業、さらに就職に関

連するライフデザインガイダンス等も正規の授業の本流としての位置づけをしていく必要があるだろう。21世紀は心の時代ともいわれ、今後、従来のアカデミックな大学教育の系統に加え、それらの学問や知識が自分の問題や社会の問題解決に有用であることを体験できる授業を、個々の学生のニーズに即した形で大学が開発し、用意する必要がある。

学生と教員の関わりの原則

グローバル化する世界で生きる学生は、「自己決定・自己責任」できることが要求される。その指導には、教員がまず学生の背景と個別ニーズに耳を傾け、それを土台に問題解決をお互いの知識と経験、そして情報を重ね合わせ、対話を行い、必要があれば学生相談所等の専門家を紹介する。このように「学生と教員等が相互に助けあう関わり方」が必要であろう。これが学生と教員の「相互輔（ほ）生活動」であり、この過程の中で学生に自己決定する機会を作る。これによって学生が独立して考え(Independent thinking)、独立して行動(Independent behavior)できる市民に育つと考えられる。教員世代と大きく異なる生育の背景と学習歴をもつグローバル化・情報化時代の学生と関わるには、我々教員も多文化型の人権にも配慮した対話能力を持つ必要がある。

おわりに

我々教員は、学生との間にこのような教育課程と社会的価値観の変化による世代間の特質の差があることをまず十分認識することが重要であろう。このような認識に立って、東北大学の研究中心主義を支える伝統ある「研究・教育一体型の教育システム」、つまり研究室で教員と学生が一体となり、相互輔生の関わり方で研究と学びの体験をする教育形態は、教員と学生の相互の人間形成および学生に対する教育効果を今まで以上に高めることになると思う。





総合科目「自分」の教養教育論

教育学研究科教授 水原 克敏

総合科目「自分」では、学生・院生・教員・社会人等に青年期の自己形成史を振り返ってもらい、その話を参考にして約300名の受講生に討論と感想文提出を求めている。その際、司会と舞台設定は、研究室の学生・院生や学友会映画部をお願いしているところがミソで、とりわけ司会の女子学生たちのお陰で学生との距離を縮めることができている。

授業では、それぞれの人の自己形成にとっていくつかの画期点があるはずで、その画期点において、どのように「自分」を始末したのか、その結果、「自分」はどんな新たな展開をするようになったのか、このような問題を討論や感想文で掘り下げることで、自己理解の浅さや偏見に気づき、かつ人間・社会・自然への理解が深まることを期待している。教養以前の教養への耕しのつもりである。

ただし、これは一種の禅問答のようなもので正解があるわけでもなく、学生たちが学生同士の意見や感想によって自問自答を重ね、あれやこれやと解釈をこねくり回して、決め付けの判断や殻を自ら砕き、しだいに本来の「自分づくり」への「つぶやき」を始めることを期待している。ここに原初的な学問への芽があると私は考えている。



大学では、教養教育（全学教育）と専門教育（学部教育）とがなされているが、多くの学生は、教養教育が高校の延長みたいでつまらないと言う。専門教育に進むにしたがって、自分のやるべき道が確定し専心することになるが、それ以前の教養教育では、多くの学生は単位を取るだけの姿勢で臨み、まっとうな学びが成立していない状況にある。総合科目「自分」で学生に教養教育の不満点について意見を求めたら、次の3点が出された。

第1に、大学では、高校教育でどこまで修得したかを踏まえないで授業が一方的に展開されるので、

理解できないことが多いという、高・大カリキュラムの接続性の問題である。確かに、最近、高等学校の選択的カリキュラムと大学入試科目の減少とによって、入学生の教養は一様な内容と水準にない状況にある。理系の学部で、日本史をどの程度修得してきたかを学生に聞いてみたら、1割程度履修済みで、9割の学生は受講していないことがわかった。ということは、理系学部の学生向けには、中学校レベルの日本史理解を前提に教養教育を展開しなければならないということである。

第2には、もっぱら教養教育だけが集中的に2年間まとめて施されることが多く、学生にとっては、専門教育との関係が見えないために、教養教育自体の意義も理解しにくいという、専門教育との接続性の問題があげられた。

これは2つの問題がある。ひとつは建物の関係があって、せっかく、カリキュラム編成の原則を「積み上げ型」から「くさび型」に変更したにもかかわらず、事実上、旧来の「積み上げ型」のカリキュラムが残ってしまったのである。

もうひとつは、カリキュラムに関わることで、教養と専門との関係がきちんと構造化されていない、という問題である。教養教育は、学部にとっては責任外であるとして、学部として十分に対処してこなかったため、教養と専門の構造化が今なお弱いままである。

そして第3に、教える教員が学生の顔も見ずに、自分の専門を一方向的に話して帰るだけという、教員の側の教育意欲と教育方法の問題が指摘された。教養教育担当の大学教員は、どちらかという、自分だけが損な役割を担わされているような感情、被害者意識があるので、教えることを素直に喜べないし、学生に真正面から挑むことができないのである。また、大学教員は教育方法が貧弱で、予備校などの意欲的な授業を受けてきた受験生には、入学以前の大学への期待が大きいだけに、その落差にがっかりするのである。

これら3点の問題が「自分ゼミ」の討論で意見として出されたが、さらに第4に、私のカリキュラム研究の観点から見ると、教えるべき内容が教養教育として編成されていないという問題がある。仮に歴史を例にとるなら、教員の狭い専門の一部分を教えるだけでは、「教養としての歴史教育」にはならないのであり、数学も同様で、数列だけを教えて教養教育をふさぐやり方は、教員の側だけの都合主義である。



どのような学生をつくりたいか、例えば、民主主義社会の市民的リーダー、あるいは研究開発の先駆者を養成するなど、掲げる教育理念・目的とかがわかって、大学によって教養教育のカリキュラムは

相違してよいが、その教育理念・目的とは無関係に、教員の狭い関心と断片的な専門を教えるだけの教育では、多くの学生たちにとって教養形成にはつながらず、という問題がある。

そして第5に、大学側の問題のみならず学生自身の「自分」の問題があって、ここで総合科目「自分」の存在理由がある。というのは、大学が上記4点を改善したとしても、学生自身が、不本意入学のショックから抜けきれず、虚脱感の中で自分を積極的に肯定できないために、「わたしを創る」ことができない状況にあるからである。2001年度の「自分」の授業で驚いたことは、全入学生2500人の内、約4割の学生1000人が不本意入学で、その1割の100人位がかなり重く引きずっていると見られたことである。

他方、夢と希望を持って入学してきた学生が多数いることも事実である。しかし、上記の4点の理由によって、実に多くの学生が大学教育に失望して倦怠感に襲われ、いわゆる「5月病」に罹ってしまう。「自分」の授業での感想文を見ると、5月ころから、上記4点に対する大学への批判と恨みと諦めが多く出てきて、やがてほとんどの学生が無気力になっていく様を見ることができる。

このような学生たちを、いかにして読書に開眼させ、「学問への志」を持たせることができるだろうか。第5に述べた学生の状況は深刻であるが、ある意味では、チャンスである。上記のような問題状況にあればこそ、読書によって自問自答し、人の「語り」によって深く共感し、討論によって立場の違いを理解し、そして自分を綴ることによって自分を砕き、やがては「志のつばやき」を始めるのである。その契機を総合科目「自分」という授業で作りたいと考えている。

すでにこの成果は、『自分 私がわたしを創る』（東北大学出版会、2001年）と『自分 わたしを拓く』（同、2003年）そして『自分 わたしから私たちへ』（同、2004年）の3冊を刊行している。ぜひお読みいただきたい。

なお、私は目下、学校参加ボランティアに重心を移し始めている。2004年9月現在で、全学の学生・院生130名余が参加しており、楽しい教育の機会を創出したと思っている。学生たちが、少年少女たちからの様々な問にどのように答えるか、その返答の過程で自問自答が始まり、成長の糧を得ることができるはずである。



退職(予定)教員から



新しい大学教育のために

工学研究科教授 野澤庸則

教養教育の重要性はここで言うまでもありませんが、近年教養教育を中心に、大学教育に関する課題が様々な形で議論されています。¹⁻⁴⁾そして、改革、変化というキーワードが目立ちます。根本的な問題としては大学大衆化時代に見合った教育が行われていないことに対する問題提起があります。^{2,4)} 大学への進学率が上がり、今や全高校生の5割以上が大学に進学します。また、少子化の影響で入学試験での選抜もかかりにくくなっています。東北大学について言うならば、入学してくる学生は高校の上位クラスで資質は高いと言えます。それでも、一般的に考えられているような大衆化に伴う様々な問題も顕在化しているようです。大学で何をするのか、何のために大学に進学するのが定まっていない学生も多いようです。このような学生を含めて、大学にいる間に、その考えを固めさせ、様々な分野でリーダーとなるに足る資質をもった学生として社会に送りださなければならぬこととなります。教授団の意識改革と学生の自覚が必要と思われれます。

教育の目的は人材の育成にあります。そして、人材の育成とは、一人ひとりの可能性を育み、これを顕在化するのに力を貸すことであります。一方、大学には、それ相応の教育の達成度が要求されております。これに加えて、これからは個性化も求められます。どの分野の、或いはどのような観点からの人材育成に力を注ぐのか、各大学が得意とする守備範囲の選択が迫ら

れていることとなります。

東北大学の中期目標では「学部教育では、豊かな教養と人間性を持ち、人間・社会や自然の事象に対して「科学する心」を持って知的探求を行うような行動力のある人材、国際的視野に立ち多様な分野での専門性を発揮して指導的・中核的役割を果たす人材を養成する」とし、その目標に沿って「学士課程全学教育では、全人的な教養及び各分野に必須な基礎知識を身に付けるとともに、学生自身が主体的に専門性の向上に取り組めるように指導し、「学生を育て伸ばす教育」を行うとしています。そして、「きめ細かい修学相談・進路指導や生活指導を組織的に行うことによって、学生の人間形成を支援し、意欲の喚起や学習支援の充実を図る。」こととしています。これらの目標を達成するためにも、教育に対する意欲と優れた教育を行うことに対する評価法を確立し、教員個人の教育能力開発にインセンティブを与える必要があると思われれます。⁵⁾

最近行われた大学評価・学位授与機構による教養教育評価において、東北大学の教養教育は、その実施体制、教育課程の編成についてはかなり良い評価を受けましたが、教育方法と教育の効果については改善の必要も指摘されております。特に1)教育方法についてシラバスに予習等の授業時間外学習についての指導の記述が足りないこと、2)教育の効果について、卒業生による評価を判断できるデータの不足について

の指摘がなされています。1)については、大学設置基準第21条において、単位取得の必要条件が1単位について、45時間の学習を必要とするとなっていることに関連します。東北大学の多くのシラバスには、15時間分の講義の内容に関する記載はありますが、それ以外の30時間分の自習、復習等の学習について具体的に指導する記載がないので、改善の必要があるということであると思われます。シラバスについては、現在、全学的に必須項目を見直すことがなされていると理解していますので比較的簡単に改善ができると思われます。そして、それに実質を与えるようにすることが必要となります。2)について考えますと、大学は当然の責務として、自ら設定した目的・目標に即した自己評価を行わねばなりません。改正された学校教育法にも、まずそのことが謳われています。この際、重要なのは、学生や卒業生、企業を含めた多様な関係者の、それぞれの立場からの意見を広く聴取し、問題を共有しつつ改善策をともに作り出していく過程です。各大学でそのようなプロセスが機能して、教育の仕組みをスパイラルアップしていけるかが重要となります。東北大学の中期目標にも「自己点検評価、学部評価、大学評価・学位授与機構等の各種の評価結果を有効に利用して、教育改善を図る。」とあるように、大学の主体的な自己点検・評価が最大限生かされることが期待されます。このためにも卒業生を含めた意見を聴取し、教育成果の検証もなされることが必要となります。

教育・研究成果の検証に資するために、現在東北大学では、様々な資料のデータベース構築が進められています。この際考えておくべきことは、数値化されたデータに基づく定量的評価においては、直接、データを、解釈し、判断を下すことになり、このやり方は明解ではありません

が、必ずしも適切とはいえないところもあることです。なぜなら、数値化されたデータが示すのは、いわば現在高であり、これも一つの指標であることは間違いありませんが、より重要であるのは、ここに含まれた可能性を読み取ることであると思われます。教育とは可能性を切り開くことであるならば、可能性への評価があつてしかるべきと考えます。そのためにも、構築データベースは可能な限り定性的評価ができるものであって欲しいと思います。東北大学の場合、学部レベルのデータベースには自由記載欄を設けているものと理解していますが、これを更にその下のレベルまで拡張し、個人が、特色のある取組をアピール出来るような自由記載欄があればよいと思います。そして、それらに基づく評価から、優れた教員等にはどんどん教育賞等を授与し、努力が報いられるシステムを構築できれば素晴らしいと考えます。そして、何よりも、教育改革を志す時、学生は未来を生きる者であることを忘れてはならないと思います。

最後に参考とした書物は、大学評価・学位授与機構の紀要ならびに以下の書物であることを記して感謝を表します。

1. 舘 昭著「大学改革日本とアメリカ」玉川大学出版部、1997年、12月
2. 梶田叡一著「新しい大学教育を創る」有斐閣選書、2000年4月
3. 網川正吉編著「ICU リベラル・アーツのすべて」東信堂、2002年10月
4. 溝上慎一編「学生の学びを支援する大学教育」東信堂、2004年3月
5. 喜多村和之著「新版大学評価とはなにか - 自己点検・評価と基準認定 - 」東信堂、1996年、6月



「出会い」に備えて「基礎」を大切に

生命科学研究科教授 大 類 洋

「私の経験した発見は全て、多数の人がそれ以前にすでに見たと思われる小さな偶然から得られたものでした」-----セント・ジェルジー

これは自然科学における偶然の出会いの大切さを説いたものである。セント・ジェルジーは偶然の出会いを“生きた目”によってチャンスと言うべき価値ある出会いと高めノーベル賞へと繋げたのである。出会いには“人と人”、“人と事象”、“人と自然”など様々あろうが、出会いを貫く主体は自分自身である。

「偶然是準備できていない人は決して助けない」-----ルイ / パスツール

これらの二つの言葉はまさに至言である。私は“準備”とは“基礎”と思っている。

この夏30年ぶりにニューヨークに行き、コロンビア大学を訪れついでにテネシー大学にも足を運んだ。マンハッタンは30年前と全く様相を変え非常に安全な町になっており、人々も生き生きとしていた。両大学では学生達が熱心に勉学に励んでおり、爽やかさを感じた。テネシー大学では夕刻から校内ポリスが巡回し飲酒をしている学生の取締りに当たっていた。

アメリカはベトナム、アフガン、そしてイラク戦争と対外的には受け入れ難いことを行っているが、国内では人々がルールを守り明日の為のより良い国創りに努めているようであった。そしてそれが全く自然に見えた。

大学でも然りである。学生に対する教育は厳しく、学生達もそれを当然として受け入れ熱心に勉学に汗している。その結果、社会が大学卒を当然それなりに評価し、受け入れている。かなり健全なサイクルが働いている。

我が国はどうであろうか？

私は抗エイズ薬の開発研究をしているので特に関心を持っているが、先進国でエイズ患者（特に若年層）が増加しているのは我が国だけである。社会が明日の我が国を考えずに若者を毒している（ビデオ、テレビ、マンガなど）。社会全体が自己責任と教育（勉強だけではない）を怠ってはいまいか？

大学では大学入試方法の改変から始まり、大学院大学化、そして極めつけは独立法人化である。これらの改変（悪？）に伴い、教養学部が廃止され、大学が工学部・医学部を中心とする先端のテクノロジーの教育・開発の場（もっと悪く言えば金作りの場）に成ろうとしている。教官達は雑用が増え、雑用をこなす事が大学の仕事と勘違いをし始めている。これらの改変は果たして必要であったのであろうか？大変疑問である。

大学は“学生が自ら勉学するところ”である。知識（答）を教わるところではない。教養学部では広く勉強し、入学時の理系・文系の選択を含め、自分の興味あるものを見つける期間だと思おう。理系・文系の選択の誤りに気付いて、それを変更しても十分間に合う。研究室に進学し、真面目に勉強すれば2～3年で最先端の情報まで理解出来るようになるものである。

教官は単に知識の伝達だけに留まらず、自分が行っている研究分野が如何に魅力のあるものかを学生に感じさせ、学生が興味を持ち進んで勉強を始めるようにさせる必要がある。知識は教科書で十分得られる。大学で補習が行われているようであるが、勉強をする必要が有れば学生達が集まって高校生用

の教科書をしかも英語の教科書を読み合えば良いと思う（英語の勉強にもなり一石二鳥である）。
ともかく社会、大学、学生が本来あるべき姿（基礎）を大切にすることを求められているのではないか？

「曙光」(しょうこう)の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

(命名及び表紙題字)元東北大学総長 西 澤 潤 一



仙台で歴史を学ぶ意味

東北アジア研究センター教授 入間田 宣 夫

いまから四〇年ほど遡って、文学部史学科国史研究室(いまは日本史研究室)で、卒業論文を書いている辺りには、このまま仙台で勉強を続けていても、一人前の研究者になれるのか、どうか、不安だった。

日本中世史の研究では、京都の公家政権、ないしは鎌倉の武家政権(幕府)に、直接・間接に関わるテーマを取り上げるのが、常道とされていた。もしも、荘園の管理・運営や地頭の職務権限など、地方的な素材を取り扱ったとしても、公・武の政権による全国支配におけるサンプルとしての素材の位置づけを鮮明にする姿勢が必要とされた。その姿勢に欠ける論文には、「全国レベル」に達していないという厳しい評価が投げかけられた。同じく、政治的な事件を取り扱ったとしても、公・武の政権の安危に関わる要素が指摘されていなければ、取るに足りないという厳しい評価が投げかけられた。

そのために、公・武の政権に直接・間接に関わるテーマを取り上げることになったのはよいとして、その先で、行き詰まってしまった。

公・武の政権に直接・間接に関わるテーマに取り組むためには、公・武の政権が残した文書・記録の山にアクセスしなければならない。ところが、仙台では、それがままたらない。

京都や鎌倉方面には、文書・記録の現物が相当程度に残されている。東京大学史料編纂所には、明治以来、国家的事業として収集された文書・記録の影写本(手書きコピー)の山が架蔵されている。東京大学や京都大学に在学していれ

ば、現物・影写本、いずれにも、アクセスが容易である。土地勘のうえでも、断然有利である。東北大学に入ったことを後悔する気持ちに襲われた。

しかし、めげないで、がんばった。そのうえに、基本的な文書・記録類が、活字本によって公開され始めた。先輩たちのように、史料編纂所の前に何ヶ月も寄宿する必要がなくなった。あれやこれやで、ようやくにして、学界にデビューすることができた。ほっとした。

だが、間もなくして、このままでよいのか、東京や京都の真似に安住しているだけでよいのか、という疑いの気持ちが芽生えてきた。東北にも、人びとの暮らしがあり、歴史があったのではないかと。確実な文書・記録には恵まれていないが、工夫をすれば、それなりに歴史を復元することができるのではないかと。全国レベルの研究として評価されることは難しいとしても、意味のある仕事ではないかと。という気持ちが湧き上がってきた。

そのつもりで調べてみると、おもしろい。東京や京都からでは見えないものが、見えてきた。たとえば、1189年(文治5)、鎌倉勢が平泉藤原氏を攻め滅ぼした合戦に関して、これまでは、鎌倉幕府の記録、『吾妻鏡』に記された「奥州征伐」という表現が、そのまま、歴史用語として採用され、教科書ほかにも使用されてきた。だが、平泉の側から見れば、この表現は納得がいかない。これでは、平泉の側に非があったかの

ような印象になりかねない。難癖をつけて一方的に攻め込んできた鎌倉側に、正義の立場が具えられていたかのような印象になりかねない。そこで、当時の文書・記録類を片端から当たってみることにした。そうしたら、「奥州合戦」「奥入り」「奥迫め」ほかの表現が、次々に浮かび上がってきた。すなわち、同時代人の多くは、鎌倉側に正義ありとする感覚を抱いていなかったことが分かってきた。

それにあわせて、南九州・中国地方の住人までが動員されて、鎌倉勢に参加させられていることが分かってきた。これまで、鎌倉勢の文字通り、鎌倉に親近の関東御家人が攻め込んだと考えられてきたのに比べれば、大きな違いである。

東京や京都から地方を漫然と見下ろしているだけではいけない。それでは、『吾妻鏡』の権威に引きずられて、知らず知らずの間に、鎌倉幕府の立場に同調させられてしまうことになりかねない。鎌倉幕府の立場に制約されて、歴史の総体を見失うことになりかねない。

これからは、地方の立場に即して、わが身に引きつけて、切実かつ具体的に問題に立ち向かわなければならない。すなわち、仙台にすることを、プラスの条件に変えてゆくことを目指さなければならない。という、前向きの想いが生まれてきた。

そのような想いを込めて発表した論文は、意外にも、好評だった。東京・京都の研究者によっても、快く受け止めてもらえた。かれらのなかにも、これまでの姿勢に対する反省が兆していたためかもしれない。いまでは、文治五年「奥州合戦」の歴史用語が当たり前になっている。「奥州征伐」の言葉は、学術書でも、一般書でも、教科書でも、少数派になっている。

振り返ってみれば、近代の歴史学は、良くも

悪くも、国家の枠組に縛られていた。その枠組に収まる研究ならば、よし。それから外れるならば、「全国レベル」に達していない、マイナーかつ素人くさい研究として、見下げられた。

それによって、国家に関わる確実な文書・記録類が収集され、歴史学の確実な基礎が固められた。以前における不確実な歴史学、すなわち伝説・伝承などを織り交ぜた物語風の歴史学に比べれば、大きな進歩である。

だが、確実な文書にばかり拘っていると、それを系統だてて残した国家の立場、いいかえれば支配者として勝ち残った側の立場に、意図せずとも、同調させられてしまうことになりかねない。それでなくても、一方の立場からする視野を、共有させられてしまうことになりかねない。これでは、敗者の側の歴史が見えてこない。地方の歴史が見えてこない。アイヌや琉球の歴史が見えてこない。一般庶民の歴史が見えてこない。女性・子供・老人の姿が見えてこない。

仙台に学んでいなければ、そのような近代歴史学の限界を、いち早く体感することができなかったかもしれない。その後、しばらくして訪れた近代歴史学の見直しの潮流のなかで、主体的な立場を確保することができずに、押し流される一方だったかもしれない。都市平泉の発掘・調査現場に通ったり、津軽安藤氏の系譜伝承などに取り組んだりしながら、歴史学の幅を広げるために、自分なりのチャレンジを試みることができなかったかもしれない。

仙台に学んでいて、本当によかった。東京や京都では見えないが、仙台では見える。という世界が間違いなく存在していたのである。すくなくとも、歴史学の分野では、そうであったし、今でも、そうなのである。他の学問分野でも、それが妥当するのか、どうか。皆さん自身で、確かめてもらう以外にはない。

東北大学OBから



「現代学問論」を担当して

東北大学名誉教授 渡 辺 誠

本年3月定年退官ということで、昨年4～5月に全学教育の「現代学問論」の1/3を担当しました。現代の学問は当然多岐にわたっている訳ですが、私は自分の専門分野を中心として「放射光科学入門」という講義をしました。放射光は光速に近い速さで円運動や蛇行運動をする電子が放出する光のことで、赤外から極紫外・軟X線、さらには硬X線の広範囲な領域において利用できる優れた光であり、現在、物質科学や生命科学における分析手段として不可欠になっています。講義では放射光の発光の原理、加速器や分光器の原理および利用研究の話を概観する中で、それらに必要な電磁気学、相対論、光学、量子力学、化学結合論などの入門部分を易しく話しました。そして、一つの科学分野でも多くの基礎的な学問の上に成り立っていること、そして先端的な研究を行うために、新入生諸君はそれら基礎的学問をしっかり学んでいく必要があることを訴えたつもりです。以下ではこの講義を通じて感じた三つのことを述べたいと思います。

まず最初に、4月の初め大多数の新入生は元気がつらつと8時50分からの授業に出席したことを言っておきたいと思います。欠席者は非常に少なかったです。一方、学部生や大学院生をみると、朝早く起きて登校することが大変不得意になっているように思えます。この講義を担当してみて、早起きが不得意なのは新入生からの習慣ではないと思いました。仮に学年が

上がるにつれて講義の数が減っていくのであれば、朝1番のものは減らさずに、午後の遅いものから減らす方が良いのではないのでしょうか。

次に授業中に力をつけるということに触れたと思います。私の講義は一般論的なものでしたので、少しでも具体的な知識あるいは理解力を身につけた方が良いのではないかと考え、5回のうち3回はミニレポートとして講義の内容に関する簡単な問題を出し、その解答のために授業時間の30分ほどを使いました。学生諸君が解答している間に教室をぐるぐる歩きまわって質問を受けました。壇上で話をしている時には質問はあまり出ませんでした。そうやって教室内を回ると多くの質問が出ました。大きな教室で多数の人がいる中では質問はし難いようですが、近くではし易いようでした。そして学生に自分から取り組む機会を提供することが力をつけるために重要だと思いました。私の方は理解の程度を確認することができました。ミニレポートは採点して次の授業で返却しましたが、返却に時間がかかってしまいました。

最後に評価について述べたいと思います。「現代学問論」は3人の教官がそれぞれの得意分野の話をするので評価はし難いと思われま。しかし、一つ感じたことは、合格、不合格という採点は不適當ではないかということ。というのは、しっかり聞き内容を良く理解している者と、少数ではあるが、出席率が低くすぐに寝てしまう者とを同等に評価してしまう

評価法では、真面目な人間を鼓舞することはできないと思いました。しっかりと評価するように是非すべきだと思います。

今回「現代学問論」を担当して、新入生の諸君を如何に勉学に引き付けるかの重要性を改めて感じた次第です。そして私にとっては楽しい

講義でした。講義にはOHPを使用したのでノートを取り難いと思い、毎回OHPのコピーを配布しました。その際、コピーの印刷を教務係の方々に快く引き受けてもらいました。この場を借りて御礼申し上げます。

平成16年10月1日発行

編集 東北大学全学教育審議会広報編集委員会
坂本尚夫 全学教育審議会委員長
工藤博司 全学教育審議会副委員長
鈴木岩弓 文学研究科 教授
山口雅彦 薬学研究科 教授
高井俊行 加齢医学研究所 教授
縄田朋樹 大学教育研究センター 教授
発行 東北大学全学教育審議会

Webによる履修登録手続について

－（学内の）パソコンを利用したWebによる履修登録手続－

平成16年度2・4セメスターから、**理学部2年次学生を除く**、全学部1、2年次学生（留年者も含む。）の履修登録は、次のように（学内の）パソコンを利用して、Webによる履修登録を行ってください。履修手続きは、**履修カードの提出とWebによる履修登録の両方を必ず行ってください**。履修手続きが不備だと単位が認められませんので、注意してください。

平成16年9月29日

大学教育研究センター

履修簿の配付 ↓	9月30日（木）～	※管理棟2階⑤～⑦番の教務窓口で、履修簿と一緒にWeb履修登録に必要なIDとパスワードを配付しますので、必ず受領してください。
履修カードなどの受領 ↓ (履修計画の作成) ↓	9月30日（木）～	
履修カードの提出 ↓	10月1日（金）～ 10月14日（木）	※履修カード、履修科目届、Web登録の操作説明書 ※Web登録の操作説明書は、継続して使用しますので、各自大切に保管してください。 履修科目届の提出は必要ありませんが、登録作業を早めるため、あらかじめ計画作成の際に記入して、Web履修登録日に持参してください。
Webによる履修登録 ↓	10月18日（月）～ 10月22日（金）	※履修カードを提出しただけでは、単位が認められません。Webによる履修登録を必ず行ってください。 ※Webによる履修登録は、学部毎に定められた履修登録日及び利用可能な時間帯に、マルチメディア教育研究棟1階のICL演習室1とICL演習室2のパソコンを利用して、各行ってください。なお、昼休み時間帯の利用は混雑が予想されます。あらかじめ予定して、定められた履修登録日に行ってください。 ※理学部2年次学生については、別途掲示します。
Webによる履修登録に関する注意		
<p>※「最終登録」を実行しますと訂正や変更ができませんので、注意してください。訂正や変更が予定される学生は、「最終登録」を実行しないで一時保存状態で終了し、10月25日（月）～10月27日（水）の期間を利用して、登録内容を確認してから「最終登録」を実行してください。この際、訂正等が無い場合でも10月27日（水）までに忘れずに必ず「最終登録」を実行してください。</p> <p>なお、「最終登録」を行った後に訂正等がある学生、又は、誤って「最終登録」を行った学生は、平成16年10月27日（水）（期限厳守）までに管理棟2階 ⑤～⑦番の教務窓口へ申し出てください。</p>		
履修登録の確認訂正等	10月25日（月）～ 10月27日（水）	履修登録内容を再度確認したい学生や「最終登録」を行っておらず、一時保存状態で終了し、訂正変更したい学生などのための期間です。学部毎の指定がありませんので、最終日は混雑が予想されます。早めに利用してください。なお、期間の延長はしませんので注意してください。 (10月28日以降は、履修科目の訂正、削除、追加などができませんので、注意してください。)

各学部のWebによる履修登録日（※Webによる履修登録のために使用するパソコンは、授業などで演習室を使用していない時間に利用できます。利用時間を厳守してください。）

履修登録月日	対象学部・学年	履修登録場所 (MM棟1階)	Webによる履修登録のためのパソコン利用可能時間				
			第1講時	第2講時	第3講時	第4講時	第5講時
10月18日(月)	工学部・2年	ICL演習室1	メンテナンス	10:30～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	16:20～18:00 パソコン利用可能
		ICL演習室2	メンテナンス	10:30～14:30 パソコン利用可能	授業	授業	16:20～18:00 パソコン利用可能
10月19日(火)	工学部・1年	ICL演習室1	8:50～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	授業	16:20～18:00 パソコン利用可能
		ICL演習室2	授業	10:30～18:00 パソコン利用可能	授業	授業	
10月20日(水)	文、教育、法の各学部・1,2年	ICL演習室1	8:50～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	授業	14:40～18:00 パソコン利用可能
		ICL演習室2	授業	10:30～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	14:40～18:00 パソコン利用可能
10月21日(木)	経済学部・1,2年と理学部・1年	ICL演習室1	授業	10:30～18:00 パソコン利用可能	授業	授業	
		ICL演習室2	授業	10:30～18:00 パソコン利用可能	授業	授業	
10月22日(金)	医、歯、薬、農の各学部・1,2年	ICL演習室1	授業	授業	12:10～12:50 パソコン利用可能	授業	14:40～16:10 パソコン利用可能
		ICL演習室2	授業	授業	12:10～18:00 パソコン利用可能	授業	
10月23日(土)		ICL演習室1	(休業日)				
10月24日(日)		ICL演習室2	(休業日)				

登録確認等月日	対象学部・学年	登録確認等場所 (MM棟1階)	Webによる履修登録の確認等のためのパソコン利用可能時間				
			第1講時	第2講時	第3講時	第4講時	第5講時
10月25日(月)	全学部1,2年(理学部2年を除く)	ICL演習室1	授業	10:30～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	16:20～18:00 パソコン利用可能
		ICL演習室2	授業	10:30～14:30 パソコン利用可能	授業	授業	16:20～18:00 パソコン利用可能
10月26日(火)	全学部1,2年(理学部2年を除く)	ICL演習室1	8:50～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	授業	16:20～18:00 パソコン利用可能
		ICL演習室2	授業	10:30～18:00 パソコン利用可能	授業	授業	
10月27日(水)	全学部1,2年(理学部2年を除く)	ICL演習室1	8:50～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	授業	14:40～18:00 パソコン利用可能
		ICL演習室2	授業	10:30～12:50 パソコン利用可能	授業	授業	14:40～18:00 パソコン利用可能